

# 松田二郎先生の 米寿を祝う会

齋藤 俊治

小雨立ち濛端に花筏浮く

赤亭

桜花のもとでの其処彼処でのさまざまな宴もようやく果てようとする4月27日夕。朝から小雨が間歇的に降り続き肌寒い日であったが、東京第一ホテル鳳凰の間あたりは、温かな空気で和んでいた。

庄内日報紙上にたびたび寄稿されている故、その名をご存じの人も多いだろうが、「松田二郎先生の米寿を祝う会」なる集いが開かれることとなり、5時の開会に合わせて集い来る人たちの旧交を温め合う声が交わされていた。

かつて紅き頬今いかほどの色  
橙火

会の発起人となったのは、かつての「教え子」たち。

松田先生は、今の教育界事情からは考えられないこ

とであろうが、教師となつて初任の鶴岡南高校に約20年奉職され、その間担任として4年ごとに4度卒業生を送り出した。その後鶴岡工業高校定時制に転じ、ここでも機械科のクラスを4年間担任し、18名の卒業生を送り出した。

担任として関わった生徒だけでも200名を超え、他に国語教師として、部活動の顧問として関わった生徒を含むと、教知れぬ少女と縁を結んだこととなる。

因みに私は、先生が鶴岡で最後に担任をされたクラスの一員という縁で、この拙い文を書き起こしている。

葦立ちや老いの眼にしむ緑かな  
黄土

各クラスの卒業生を記せば、昭和36年にはじまり、同40年、44年、48年、54年となり、「教え子」たちも還暦、古稀、喜寿の年代に

あたり、昭和もまた「遠くなりにけり」といった感慨も湧く。

あか児みどりの児やがて老いの身  
緑羽

この会が開かれるに至った経緯を、もう少し詳しく記せば、山王通りの三浦系屋店主の三浦新氏を中心とする44年卒のクラスが、本年鶴岡卒業50年にあたることに、古稀の歳でもあることから、佳節として集うことになっていったが、松田先生も「米寿」という節目にあたっており、ならば各年代の「教え子」たちに呼びかけて集おうではないかという運びになったのである。

先に記したように、同じ高校に約20年奉職するという「特殊事情」による縦の繋がりがあつたということも大きな要因ではあるが、やはり何より、先生のお人柄によつて大と言ふべきだろう。

青蓋微もとめて奔馬何処へか  
青花

各自の「思想信条」を問うならば、互いに相容れないところもあろう。あるいは

は、私などのように、高校生であつた頃の自分に恥じ入る思いばかり抱き、出来れば思い出したくはないというような心情にかられる者もいよう。歲月の力によるところ大と言ふべきなのだろうが、そうした種々のことどもを差し置いても、

会って語り合いたいと思う心情の底には、やはり先生の存在が大きく且つ重く、あるのである。

藍童

さて「祝う会」の様子であるが、祝宴前の挨拶で先生は、かくなる集いを開いてくれたことに謝意を示されることも、かつて担任した生徒はもはや「教え子」ではなく、同じ学び舎で時間やその他もろもろのものを共有した「友人」である、という意味のことを語られた。この文において括弧付きの「教え子」と記している所以であるが、私のような不肖の「教え子」は痛み入り恥じ入るばかり、では

開宴後は、各組ごとに壇上代表が思い出やら現在の心境を語り、それを受けて先生が当時のことを振り

返りつつ言葉を寄せて下さつたのであるが、先生の濃密な「記憶」と「記憶力」に驚嘆を覚えた。「教え子」が憶えていない、あるいは忘却力を発動させて記憶から追いやつたことも先生はしっかりと憶えておられた。

先生の語る言葉に触れて、会場は爆笑につつまれたのであるが、その笑いの底に「教え子」の慚愧の念があつたことは間違いないだろう。

わっています」

同舟の縁に開く桜花かな  
蕁舟

仏法では、「教え」の高低浅深を平すものらしいが、「五味」なるものを説くと聞き及ぶ。

一に「乳味」乳そのものの味に始まり、精製や発酵が加わるにしたがつて「酪味」「生蘇味」「熟蘇味」と中身も味も変化していき、そして五に「醍醐味」となる。これは、最高無上のものとされ、もはや此の世のものとも思われぬ「甘露」の味であるとか。

先生が「教え子」との「長い長いお付き合い」に無上の味わいを感じて下さっているのであれば、若気の至り汗顔の至りを尽くした「教え子」にとつて救いと言ふべきであらう。

そして当方は、年を経て出来れば精製と熟成を重ねて、醍醐味に至ることは叶うまいが、発酵と腐敗の紙一重のせめぎ合いの中で、せめて腐すことなきものでありたいと思つのである。

「わずか三年間四年間の交流が起点となってそれ以来今日までお付き合いが長く長く続いていることを、この上なく幸せに思っています。私は今人生の醍醐味を味

散りても集ふ筏ありけり  
宗玄  
(鶴岡市若葉町)